

東大和市立第四中学校（2年目）

【校長】 和田 孝
【生徒数】 569名
【学級数】 15学級



次の取組へ

【課題・改善】

○ICT 機器の導入により使用方法の説明時間が必要とされ、生徒の活動量が減少することが課題である。
⇒使用方法の説明は、事前に把握できるよう資料等を生徒の一人1台端末に配付するなどしていく。

○新体力テストの経年変化から、生徒の運動意欲の向上や体力向上に反映させていくことが課題である。
⇒ICT 機器、特にウェアラブルデバイスの活用場を広げ、日常的に活用できるようシステムを構築していくことで、運動意欲の向上とともに体力向上につなげていく。

○健康課題については、保健体育科の授業に特化しており、他の教科や教育活動に反映させていくことが課題である。
⇒教科等横断的な取組や教育活動全体を通して取り組み、健康課題を改善していくように指導に当たる。

【実態・課題】

○「ウェアラブルデバイスの活用は、学習意欲を高めることができる」⇒(肯定的回答数)80%
⇒単元を陸上競技に制限せずに、幅広い単元で使用頻度を上げて活用を定着させる。

○「授業以外でも運動やスポーツをもっとしたい」
⇒77% ⇒運動やスポーツの楽しさ喜びを味わわせることで80%以上にする。

○「卒業後、自主的に運動やスポーツをしたい」
⇒58% ⇒75%以上にする。

⇒生徒が考えて練習を組み立てたり、運動の調整力を磨く活動を取り入れたりする。

⇒ウォーミングアップにゲーム要素を加えたり、体育委員会との連携を図ったりしながら、運動の楽しさに触れる機会を創出する。運動習慣の定着を目指す。

目標 「授業以外でも運動やスポーツをもっとしたい」、「卒業後、自主的に運動やスポーツをしたい」と回答する生徒が80%以上になるよう日常的な運動習慣の定着を目指す。

【成果】

○ウェアラブルデバイスの導入により、心拍数やラップタイムの具体的数値を記述したり、「ケイデンス」や「消費カロリー」などの専門用語に触れたりして考察を記述できる生徒が70%を超えた。

○生徒自身が運動強度を理解することで、長距離走に対し、ポジティブで意欲的に学習に励むことができた。

○ウォーミングアップの工夫や運動調整能力が身に付いたことにより、保健室の利用者数が激減した。

○「授業以外でも運動やスポーツをもっとしたい。」
⇒82%に上昇した。(5%上昇)

○「卒業後、自主的に運動やスポーツをしたい。」
⇒85%に上昇した。(24%上昇)

○全教科等でグループ活動の定着を図り、主体的な学習の習慣が身に付き、見方・考え方を働かせ、思考力の深まりが見受けられた。

【取組】

○授業(保健体育科)での取組
・一人1台端末を活用したフォーム確認、課題把握
・ウェアラブルデバイスを活用した水泳の実践
・iPadを活用したフォームのフィードバック
・アプリ『スポテク』を活用した手本動画の活用
・4人1組でのグループ学習の実践

○総合的な学習の時間を軸にした学び
・障がい者スポーツを学ぶ「ガイドランナー体験」

○特別活動における取組
・保健給食委員会で『歯磨き週間』を実施
・体育委員会で『昼休みの校庭開放』を実施
・体育委員会で『外遊びの提案ポスター』作成

【取組（詳細）】

○保健体育科における一人1台端末の活用



短距離走・リレーの単元で「カメラ」を活用しフォームの確認をした。



ダンスでは、発表会で一人1台端末から音源や学習カードを作成した。



一人1台端末を活用し、スポーツ観戦ポスターを作成した。

○総合的な学習の時間を軸にした学び



パラリンピック短距離走決勝の映像でガイドランナーについて学んだ。



体育理論・ガイドランナー体験の指導をするため、日本大学・近藤克之准教授から指導方法を学んだ。それを生かし、グループ学習で気づきを共有し、課題を探究した。



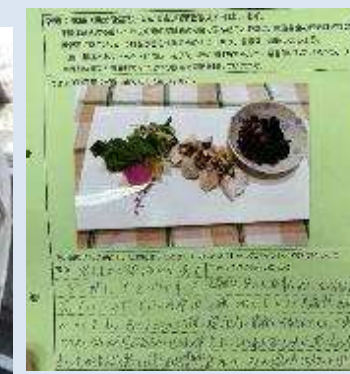
○特別活動における取組



体育委員会での「校庭開放・ボール貸し出し」



保健給食委員会で「歯磨き週間」



教科等横断的な取組
家庭科との連携で健康課題に対する献立を作成・調理をした。